九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』

阿部, 泰記
山口大学人文学部 : 助教授 : 中国古典文学

https://doi.org/10.15017/9761

出版情報：中国文学論集. 11, pp.181-203, 1982-10-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

書評

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』

阿部泰記

はじめに

三言二拍の本事研究書としては、一九八〇年に三部の大著が發表された。すなわち胡士瑩著『話本小說概論』（中華書局、一九八〇年五月、北京）、趙景深著『中國小說叢考』（齊魯書社、一九八〇年十月、濟南）、譚正璧編『三言兩拍資料』（上海古籍出版社、一九八〇年十月、上海）であり、これらの書には厖大な資料が掲載されている。私が紹介しようとする小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』は、これらの著書の成果を受け、さらに各專家および自身の論考を加え補って、翌年の一九八一年十一月に發表されたものである。本書はその意味で三言二拍本事研究の現狀を知るに至便の書であり、今後の三言二拍研究には缺かせない書となることは疑う餘地がなかろう。

ところで、私がこの文を發表するに先立ち、尾上兼英氏が『集刊東洋學』四十七號（一九八二年、五月）に本書の全般にわたる的確な書評を發表された。三言二拍の專家でもない私がその後に書評を行なうのは蛇足かも知れない

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（阿部泰記）

が、尾上氏の驥尾に付して、特に本書の論考資料の紹介、小說の梗概要約を中心に、その他編者の注記など個々の問題をも含めて論じてみたい。もとより新たに提出すべき本事資料を持たぬ私ゆえ、おのずと瑣末な點を論じることになり、本書にふさわしい書評を行なうことができず恥ずかしい次第だが、幾らかでも勞作にお答えできればと念じて已まない。

一

まず最初に、本書に紹介された論考資料について檢證してみたい。

趙景深氏は前掲の『話本小說概論』の序で、「談『三言』『二拍』來源的演變最早的是孫楷第在『北平圖書館館刊』上發表的『三言二拍源流考』」と述べ、三言二拍本事研究が孫楷第氏に始まるとする。これに對して小川氏は、本事研究の先驅者として淸の俞樾（一八二一―一九〇六年）を擧げておられる。これは本事研究史の初期に光を當てる劃期的な見解であり、注目に値する。ただ殘念なことに小川氏の記載には脫落があるようだ。小川氏は俞樾の論考、すなわち『春在堂隨筆』所收「小浮梅閒話」の一文を小說各卷に配して紹介しておられるが、その全容がわかりくいので、ここに記載して調べてみることにする。

坊間有『今古奇觀』一書、雜取古事、敷衍成書。如許武事（醒二卷）、見『後漢書』「許荆傳」、此固本之正史者。他如羊角哀事（喩七卷）、出『烈士傳』（引見『文選』注。）吳保義（安）事（喩八卷）、出『紀聞』（引見『太平廣記』。）裴晉公事（喩九卷）、出『玉堂閒話』。李汧公事（醒三十卷）、出『原化記』（但不云李汧公。）其餘如金玉奴（喩二十七卷）、爲紹興間士人事。王嬌

鸞（喩三十四卷）、爲天順間周廷璋事。芙蓉屏（初拍二十七卷）、爲至正中崔英事。鳳凰球（傳）（醒七卷）、爲萬歷初吳江錢生事。鴛鴦簿（譜）（醒八卷）、爲嘉靖間崑山民事。百寶箱（喩一卷）、爲萬歷間浙東李生事。有『情史』一書、羅列無遺。惜『情史』不注所出書、余亦不能言也。又蔡女忍辱報仇（醒三十六卷）、見祝允明『野記』、蓋亦明代事。

右の兪樾の論考は『今古奇觀』の本事考證であり、（　）中の文字は三言二拍との照應を私が便宜的に付記したものである。これらすべて十二話の考證の中、小川氏は喩七、八、九、二十七卷の四話の考證しか本書に掲載しておられない。私には掲載ミスとしか思えないが、小川氏は何か考える所があって取捨選擇されたのであろうか。

兪樾の論考に續くものとしては『曲海總目提要』（清黄文暘原本、上海大東書局、一九二八年）が擧げられる。この書は直接小說の本事を述べた書ではないが、小說に基づいて作られた戲曲の本事考證をしており、それを通じて、小說の本事も知ることができるのは周知のとおりである。三言二拍では三十三話に主な考證が見え、孫楷第、趙景深氏をはじめ多くの研究者がこれを引用し、譚正璧氏『三言兩拍資料』もこれらを掲載している。だが本書ではこの書の考證の內容が記載されず、引用者の論考の後に、ただ「『曲海總目提要』に論考がある。」と略記することが多く、主客顚倒の觀がある。やはりこの書を一論考者として認め、少なくとも資料の後に、「この資料は『曲海總目提要』に引く。」という程度の注を施すべきではなかっただろうか。

次に孫楷第氏の論考であるが、本書に收錄する孫氏の論考には、「三言二拍源流考」（一九三一年）と「今古奇觀序」（一九三三年）があり、前者の「三言二拍源流考」は、『醉翁談錄』『寶文堂書目』に見える小說書名および現存

の話本集に收錄される話本と三言二拍との二拍との關連を調べ、さらに三言二拍の本事を考證し、『情史』『智囊補』との關連についても論じている。ところで本書においてこれらを檢證してみると、ここにも揭載されていない部分を見出す。すなわち三言と『情史』『智囊補』との關連を述べた部分であり、孫氏の二十八話の調査の中、十八話が本書に缺落している。參考のために未揭載の部分を左に記しておこう。

有不注見小說者。如卷十八「張灝」條、頗與『古今小說』之「陳御史巧勘金釵鈿」相似。卷四「裴晉公」條（出『太平廣記一六七引「玉堂閒話」）、『古今小說』之「裴晉公義還原配」演之。卷二「單飛英」條、『古今小說』之「單符郎全州佳遇」演之。同上「紹興士人」條、『古今小說』之「金玉奴棒打薄情郎」演之。卷十九「張果老」（果字疑衍）條（出『太平廣記』十六引『續玄怪錄』）、『古今小說』之「張古老種瓜娶文女」演之、（此篇見『也是園目』。）卷二「玉堂春」條、『通言』（兼善堂本）之「玉堂春落難逢夫」演之。卷四「婁江妓」條、『通言』之「趙春兒重旺曹家莊」演之。卷十二「勤自勵」條（出『太平廣記』四二八引『廣異記』）、『恒言』之「大樹坡義虎送親」演之。卷十「陳壽」條、『恒言』之「陳多壽生死夫妻」演之。卷二「劉奇」條、『恒言』之「劉小官雌雄兄弟」演之。卷十「草市吳女」條（出『夷堅志』）、『恒言』之「鬧樊樓多情周勝仙」演之。卷十八「赫應祥」條、『恒言』之「赫大卿遺恨鴛鴦絲」演之。同上「張盡」條、『恒言』之「陸五漢硬留合色鞋」演之。卷二「程萬里」條（出『輟耕錄』）、『恒言』之「白玉娘忍苦成夫」演之。卷十七「金廢帝海陵」條、『恒言』之「金海陵縱慾亡身」演之。（此篇『京本通俗小說』已收。）卷九「黃損」條、『恒言』之「黃秀才徼靈玉馬墜」演之。又『智囊補』一書亦馮氏作。卷十「僧寺求子」條與『恒言』之「汪大尹火燒寶蓮寺」所演全同。同上「臨海令」

條與『恒言』之「陸五漢」篇事亦相類。

後者の「今古奇觀序」には精密で優れた論考が多く、亞東書局版『今古奇觀』が入手困難な今日、小川氏がこれを紹介されたことは、裨益する所が多いと思う。

孫氏に次ぐ趙景深氏には、三言二拍のそれぞれの來源と影響に關する論考がある。本書はその中、三言と初拍に關する論考は收錄するが、二拍に關する論考「二刻拍案驚奇的來源和影響」（一九四六年、『小說論叢』收）は收錄していない。『小說論叢』の紹介に刊記がない所からすると、或は小川氏は『小說論叢』を見ておられないのではなかろうか。確かに『小說論叢』は現在入手困難である。しかし趙氏のこの論考は、本書が出版される一年前、他の三言初拍に關する論考とともに『中國小說叢考』に收錄して發行されており、小川氏はこの書によって收錄することもできたのではないかと思われるが、當時の情況はどうだったのであろうか。この論考は分量が多く、また『中國小說叢考』は入手が容易でもあるので、ここに掲載することは控えるが、これが趙氏の後記のとおりすべて一九四六年の論考だとすれば、趙氏は二拍の九話の本事の發見者ということになり、本書にこれを收錄しなかったのは惜しまれる。ただし『銀字集』『小說戲曲新考』『小說閒話』所收の三言初拍に關する論考は、『中國小說叢考』に收錄されるに至ってやや增補されているため、この論考も『小說論叢』原載當時より或はやや增補されているかも知れない。

さて趙氏に次ぐ研究者としては葉德均氏を擧げねばならないだろう。葉氏の『戲曲小說叢考』（中華書局、一九七九年五月、北京）には「古今小說探原三則」「三言二拍來源考小補」が收錄されているが、これらの論考の發表時期

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（阿部泰記）

については一考を要する。まず『戲曲小說叢考』の出版事情について調べてみると、小川氏は何も注記しておられないが、この書に冠せられた趙景深氏の序文が一九五七年十二月に作られており、この書は一九七九年の刊行まで實に二十二年の歲月を待たねばならなかったことがわかる。この不幸な出版延期の事態は、想像するに恐らく當時の政治情勢の然らしむる所だったのであろう。趙氏の序文によれば、葉氏は一九五六年に亡くなっており、『戲曲小說叢考』は、趙氏らが整理した葉氏の未發表の遺著を含めて、その翌年に刊行される予定だったのである。さらにこの書に載せられた二論考についてそれらの發表時期を考察すると、趙氏が胡士瑩氏の『話本小說概論』の序文で、自作の論考の紹介に續けて、「接着已故的葉德均又替我補了一些篇、在刊物上發表。」といい、また同氏が『戲曲小說叢考』の序文で、「至於一些在報刊雜誌上登過的文章、以一九四六―一九四八年所發表的爲最多、大半刊於我所主編的上海版『俗文學』和『通俗文學』、也有少數刊在戴望舒所主編的香港版『俗文學』和傅惜華等所主編的北京版『俗文學』以及其他報刊。」といっている所から推して、一九四八年までに發表された論考と見ることができよう。そこで本書でも『戲曲小說叢考』所收論文を趙氏の論考の後に配置するのが妥當ではなかったかと考える。

ところで小川氏は葉氏の三言二拍の二十二話に關する論考の中、喩二十八、三十三、三十五、四十卷、警十、十一、十三、十六、二十九卷の論考を收錄しておられないが、どういう理由によるのであろうか。とくに喩二十八卷の資料『雙槐歲鈔』の詳細な檢討は、小川氏の紹介された杜聯喆氏の論考に先行するものであるし、また警二十九卷の資料『綠窗新話』も譚正璧氏に先んじて提出されたものであり、これらはとりわけ記載を省略すべきではなか

ったように思う。

葉氏に次ぐ研究者譚正璧氏の論考について、次に考察してみたい。譚氏の論考には、『話本與古劇』（上海古典文學出版社、一九五六年）所收の「三言兩拍本事源流述考」他二點と、一九八〇年十月に出版された『三言兩拍資料』（前掲）とがあり、いずれも本書に收錄されている。この中『三言兩拍資料』には厖大な資料を收めるが、その成立時期について小川氏は注記しておられないので、ここに述べておこう。『資料』の上海古籍出版社の「出版說明」には次の一文が記載されている。「本書於一九六三年打成紙型而未遑印行。現將原紙型挖改個別訛誤付印出版。」また譚正璧氏の後記も一九六三年に書かれたものであり、この書が十七年も出版が遲延されたことがわかるが、その理由は、恐らく葉氏の『戲曲小說叢考』と同じく、當時の政治情勢によるものであっただろう。そしてさらに不幸なことには、胡士瑩氏の『話本小說概論』に半年後れて出版されたために、葉氏の論考は、胡士瑩氏の論考の成果を取り入れたかの觀を呈することになったのである。しかし趙景深氏の『話本小說概論』序に、「譚正璧又寫成『三言二拍資料』約千頁。現在胡士瑩同志是集其大成。」といっている所からすると、胡士瑩氏が譚氏『資料』の成果を踏まえていることは明らかである。このことは譚氏と胡氏の發表した資料が殆んど重複するため、なおさら確認を要する問題であり、ここにあえて考察をしてみた。なお譚氏『資料』の後記にはまた、「然此書之得完成、獲助他山、實非淺尠、在此特別提出者、則爲孫楷第先生與趙景深先生多種有關三言兩拍之著作、有此諸作之提示與啓發、所省蒐檢功夫、奚啻倍蓰。而中間之勗勉鼓勵、尤以王古魯先生爲多。」と述べており、『資料』が譚氏一人の手に成るものではなく、孫氏、趙氏の成果を踏まえ、王古魯氏の激勵を受けて完成したものであることも知っておく

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（阿部泰記）

必要があろう。

以上主な研究者の論考を私なりに位置づけ、同時に本書に收錄されていない資料を指摘した。これによって本書の主要收錄論考の排列順を考えると、葉德均氏は趙景深氏の後に、譚正璧氏の『資料』は辛島驍氏の後に排列するのが妥當であろう。ところで、本書凡例四の「發表時期が數度にわたる場合もあるため、論考者の配列順序と發表時期の先後は必ずしも一致しない。」の一文は、譚正璧氏の『話本與古劇』と『資料』のために設けられているのであろうが、これは小川氏が後記にいわれる「研究史概觀の役割」を本書が果たすためには不都合であるし、譚氏の二書を切り離して紹介するのにさほど困難はないように思われるので、もともと設ける必要はなかったのではなかろうか。

二

次に本書の本事資料の紹介について見てみたい。

本書の各卷の論考は、研究者ごとに排列し、原論考を要約して紹介する形式を取っている。しかしこの形式には利點と缺點がある。というのは論考の中には、孫氏「今古奇觀序」のように詳細な資料分析を行なうものもあれば、譚氏『資料』のように資料にあまり解說を加えず羅列するだけのものもあり、前者はそのまま要約しても意が通じるが、後者は要約してそのまま資料名を羅列しただけでは意が通じず、その資料が直接的な本事なのか、それとも部分的に關係するものなのか、或は類話であるが參考のために記載したものなのか、結局原資料を見なければ

わからないからである。譚氏『資料』は資料をすべて載せているのでそれでよいとしても、本書の場合、ただ「以下の諸書に見える。」と前置きして資料名を載せるだけでは、讀者がどれほど理解できるか甚だ疑問である。それに本書が『論考集成』と題するからには論考が述べられていなければならないはずだが、果して資料名の羅列が論考と言えるのであろうか。このような場合には、結局編者が資料に説明を加えざるを得ないのではなかろうか。たとえば喩十二卷「衆名姫春風弔柳七」のように多數の資料を記載する場合には、柳耆卿が江州妓謝玉英の變心を責める場面は『綠窗新話』所引『古今詞話』に基づき、柳耆卿と三妓との交情の描寫は『醉翁談錄』「柳屯田耆卿」に基づき、柳耆卿が妓周月仙を救う場面は『柳耆卿詩酒翫江樓』話本に基づく、というように資料に對して説明を加えてこそ、資料に生命が宿り、またこの卷が複數の柳耆卿故事を調合して成立していることも分かるというものであろう。このような資料解説は必ずしも容易なものばかりではなく、解説者の見識が大いに問われる場合もあるであろうが、本事研究には缺かすことはできまい。

またはじめに孫氏のように資料分析をした論考はそのまま要約すればよいと述べたが、本書では必ずしも十分にこれを行なっていない所がある。たとえば喩一卷「蔣興哥重會珍珠衫」では、ハナン氏の論考欄に、「來源は宋懋澄『九籥前集』第十一卷珠衫である。『情史』はこれを引いたもの。」というだけで、ハナン氏の原論考に見える、「『情史』は『九籥前集』と小説に基づいて書かれた。」という文體面の考察を載せていないが、このハナン氏の考察は『情史』の記事が小説の本事たり得ないことを證明するものであり、省略すべきではなかったと思う。同樣に喩十三卷「張道陵七試趙昇」でも、譚氏の論考欄に、「本事は『神仙傳』卷四張道陵（原注――『太平廣記』卷八にも

引く）」というだけで、「小說中に見える「鶴鳴山」を現行本『神仙傳』では「鶴鳴山」に作り、『太平廣記』では「鶴鳴山」に作っていると指摘する貴重な譚氏原注を載せず、また警二十二卷「宋小官團圓破氈笠」では、杜聯喆氏の論考欄に、「本事は、明の孫雲『楊氏女傳』で、……『情史』卷一にも明王同軌『耳譚』より引いて載せる。」というだけで、原論考における、小說は『耳譚』に出たものであり、直接孫雲の傳を演じたものではない、という考察を載せていない。そもそも小川氏自身、喩三十一卷「鬧陰司司馬貌斷獄」の論考欄で、文體面の考察から、「『三國因』の出版時期は不明であるが、『三國志平話』や本卷などと比較檢討すると、『三國志平話』の冥間斷獄を擴大して『三國因』が作られ、これに手が加えられて本卷ができたと思われる。」という優れた論考を發表しておられるので、本事考證において資料の文體の檢討がいかに重要であるかはご承知のはずであり、したがってこれらの研究者の資料の文體に關する考察も掲載されるのが當然ではなかったかと考える。

また各研究者の提出資料の相違についても何らかの說明が欲しい。たとえば喩二卷「陳御史巧勘金釵鈿」では、小川氏の提出された『廉明公案』「陳按院賣布賺贓」が小說の內容に最も近いようであるが、併せて譚氏の提出した資料、『龍圖公案』「借衣」との比較も行なって欲しかったし、醒十卷「劉小官雌雄兄弟」では、譚氏は『玉芝堂談薈』を、葉氏は『花影集』をそれぞれ資料として提出しているが、これについても編著者なりの資料檢討によって、小說が兩記事の文章をミックスして用いていることを說明して欲しかった。

さらに編者は各論考の誤謬についても說明しておく必要があるように思う。たとえば醒三卷「賣油郎獨占花魁」には資料として『情史』卷三「史鳳」附が、二拍三十六卷「王漁翁捨鏡崇三寶　白水僧盜物喪雙生」には資料と

して『古今譚概』十八「臨安民」が提出されているが、原文はいずれも逆に小説を要約したものであり、本事とはいえないこと、などは、少なくとも注記すべきであろう。

以上本書の資料紹介について略述したが、實はこの資料紹介こそ、讀者が編著者の才腕を期待する所であり、本書の成果が問われる所であって、その意味でも、資料の説明、論考の比較が十分に行なわれなければならなかったのではないかと考える。

三

さて論考、資料の問題から離れて、次に本書の梗概について述べて見たい。

本書には各研究者の論考の前に小説の梗概を載せ、讀後ややもすれば忘れてしまいがちな小説のストーリーを想起するために便が計られている。小説各卷の梗概は「入話」と「正文」に分けて記載されるが、「入話」の記載には規定があり、凡例二に、「『入話なし』の表示は、入話が全く置かれていない場合のほか、詩詞や議論が置かれているだけの場合も含む。物語性を有する入話が置かれていない意である。」という。これは恐らく譚氏『資料』の凡例、「入話以有故事性者爲限。」に倣ったものであろう。

ところで、この小川氏の「物語性」の有無の判斷に對して、私は疑問を懷く。というのは、小川氏が「入話なし」と表示された次の十四の話には、物語性を有する入話があるように思えるからである。その十四の入話の内容を記せば、すなわち、

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（阿部泰記）

喩三卷「新橋市韓五賣春情」――玄宗が楊貴妃を愛して國を滅ぼしそうになる話――商人の子吳山が娼妓に溺れて命を亡くしそうになる話のまくら。

喩十四卷「陳希夷四辭朝命」――莊周が夢に蝶となる話――一睡八百年といわれる陳摶の話のまくら。

喩二十二卷「木綿菴鄭虎臣報寃」――吳王夫差が佞臣伯嚭によって國を滅ぼす話――奸臣賈似道の話のまくら。

喩二十四卷「楊思溫燕山逢故人」――宣和年間の元宵における徽宗の看燈の話――燕山での元宵の看燈の話のまくら。

喩二十五卷「晏平仲二桃殺三士」――禹によって斬られた大人防風氏の骨の話――小人晏子の話のまくら。

喩三十三卷「張古老種瓜娶文女」――仙人洪崖先生が白騾を逃がして雪を降らす話――韋官人が雪の中白馬を逃がして張古老に會う話のまくら。

警四卷「拗相公飲恨半山堂」――周公の忠義、王莽の僞瞞が日を經て明らかになる話――王安石が官位高くして政治をあやまつ話のまくら。

警二十三卷「樂小舍拚生覓偶」――錢鏐が龍を助けて長江の波濤を沈める話―錢塘江を背景とする話のまくら。

警二十八卷「白娘子永鎭雷峯塔」――靈鷲嶺、白猿洞、冷泉亭、孤山路にまつわる話――西湖を背景とする話のまくら。

警三十一卷「趙春兒重旺曹家莊」――賢明な娼妓梁夫人と李亞仙の話――娼妓趙春兒の話のまくら。

警三十五卷「兇太守斷死孩兒」――玉通禪師が戒を破って悔悟する話――寡婦失節の話のまくら。

醒三卷「賣油郎獨占花魁」――鄭元和と妓女李亞仙の風流譚――商人と妓女の風流譚のまくら。

醒十一卷「蘇小妹三難新郎」――李清照、朱淑眞が才子に嫁げなかった話――蘇小妹が才子秦觀に嫁いだ話のまくら。

初拍十八卷「丹客半黍九還　富翁千金一笑」――唐寅が鍊金術士を嘲弄する話――富翁が鍊金術に迷う話のまくら。

これら十四の入話の中、喩二十四、二十五卷、初拍十八卷については、譚氏も資料を呈示している。しかし小川氏はこの中喩二十四、二十五卷の資料は收錄しておられず、また初拍十八卷の資料は、「入話なし」の表示をしていながら收錄しておられるのはどうしてであろう。これらの入話は、明らかに本題を引き立てる役割を果たしており、正文の梗概をわかりやすくするためにも記載を省略しない方がよかったのではあるまいか。

極言すれば、そもそも入話があるのに「入話なし」と表示された小川氏の意圖自體からしてよくわからない。なぜならば、小川氏の方法によれば、實際に入話がない話との區別がつかず不便であるし、また詩詞や議論だからといって典據がないとは限らず、記載を省略する必要があるとは思えないからである。とりわけ警八卷「崔待詔生死冤家」における諸詩人の春歸詩の紹介、警十四卷「一窟鬼癩道人除怪」における士人沈文述の集古詩の解析などは長文にわたるものである。これらを「入話なし」と表示することに對して、誰しもためらいを覺えはすまいか。

さてこの「入話なし」の表示とは逆に、小川氏はまた、もともと入話でない部分を無理に「入話」として切り離すことも試みておられる。たとえば警十九卷「崔衙內白鷂招妖」がそれである。この卷のストーリーは、崔丞相が

玄宗から白鷂を賜わるが、李白が高力士と楊貴妃によって退けられるに及んで、李白と交遊のあった彼は定州へ流される。そしてその定州で息子が獵に出かけ、逃がした白鷂を追って山中を進む中に妖怪に會う、というものである。これを本書では、崔丞相が白鷂を賜わる所までを「入話」とし、その後の崔丞相の息子が白鷂を追って妖怪に會う話を「正文」としており、「正文」の冒頭を、「唐の玄宗のとき、崔丞相は河北定州中山府の長官に左遷されていた。」といって、恰も別のストーリーを語り出すかの如く始めている。しかしながら、原話ではこのように「唐の玄宗のとき」と改めて說き出してはおらず、ただ一休止して話を續けているに過ぎないのである。小川氏はなにゆえに一話を兩斷し「入話」を製造しておられるのであろうか。

同樣に、警四十卷「旌陽宮鐵樹鎭妖」は、許遜の生誕を境にしてそれ以前の話を「入話」とすることは妥當ではなく、初拍七卷「唐明皇好道集奇人　武惠妃崇禪鬪異法」も、冒頭の李遐周が安史の亂を予言した詩は末尾に再出するものであり、これは入話ではなく伏線と考えねばならない。「入話」問題は小說の形式に關することがらだが、本書の場合、本事資料の揭載に關連する問題でもあったため論じてみた。

四

つづいて、本書梗概におけるストーリーの要約について考察してみたい。

本書の梗概の特徵は、時代、場所、人物の身分を明記し、できるだけ本事考證に役立つように配慮されている所にあろう。ただ欲をいえば、本事資料に卽した要約のしかたをして欲しかったように思う。たとえば喩十二卷「衆

名姫春風弔柳七」の本事資料の一つに『柳耆卿詩酒翫江樓』話本があるが、殘念ながら本書梗概にはこの資料に基づいた小説のストーリー、すなわち「柳耆卿は、劉二員外によって黄秀才との仲を裂かれた妓女周月仙を救う。」が缺けている。このために梗概、論考いずれの檢索にも不便を感じるばかりか、小説の理解までも妨げられることにもなりかねない。同様に次の諸卷にも資料に相應する部分のストーリーが缺けている。

喩三十七卷「梁武帝累修成佛」――資料『六朝事跡編類』『朝野簽載』――「武帝は太廟の犧牲を粉麵で代行し、梁皇懺を作って郗后を供養した。また宿命により楹頭和尚を殺してしまう。」という一節。

警六卷「兪仲學題詩遇上皇」――資料『西湖遊覽志餘』――「上皇は微服潛行して、一行者に身を落した南劍府太守李直を復官させた。」という一節。

警四十卷「旌陽宮鐵樹鎭妖」――資料に擧げられる陳勳ら多數の人物が梗概に見えない。

醒一卷「兩縣令競義婚孤女」――資料『厚德錄』――「月香は幼時穴に落ちた鞠を、穴に水を注いで取り出した聰明な娘だった。」という一節。

醒三十一卷「鄭節使立功神臂弓」――資料『紅白蜘蛛記』――「鄭信はまた妻の妹月華仙子とも交わったため、姉妹（實は紅白の蜘蛛）は互いに戰い、鄭信は敗れそうになった妻を助けるため、神臂弓で月華仙子を射た。」という一節。

初拍二十二卷「錢多處白丁横帶　運退時刺使當艄」――資料『舊唐書』田令孜傳――「破落戸の李光は內官田令孜に拔擢され、朔方節度使に陞進したが、戰死した。」という一節。

二拍三十九卷「神偷寄興一枝梅　俠盜慣行三昧戲」――資料『史記』孟嘗君傳――孟嘗君の食客狗偸の事。

以上の卷には資料に即した右のような要約を付加しなければ、論考およびストーリーは理解しにくいのではなかろうか。

また本書の梗概には、省略が過ぎて原文の趣旨を十分に傳えていない箇所もあるようだ。たとえば喩十五卷「史弘肇龍虎君臣會」の正文の梗概は、「五代の史弘肇は東岱嶽の聖帝のもとに呼び出され」と始まっているが、原文ではその前に、「笛造りの閻招亮は東岱嶽の炳靈公のもとに召され龍笛を作るが、そこで見た男が史弘肇であった。」というくだりがある。これは龍笛に關連する入話を受けた部分であり、また後に語られる史弘肇と閻招亮の妹越英との結婚の話の導入部にも當るため、記載を省略すべきではなかったであろう。

同樣に喩三十九卷「汪信之一死救全家」では、程彪兄弟が汪信之から、十分な接待を受けなかったため、恨んで虛僞の密告をしたと要約されているが、原文によれば二人は汪信之のもとを去ったのち洪恭を訪れるが、洪の愛妾がけちで、洪に二人を歡待させず、二人は身を寄せる所がなくなり、鬱憤晴らしのために虛僞の密告をするのである。二人の洪恭訪問を記載せねば、主題である汪信之の不幸が、讀者の目に同情すべきものとして映らないであろう。また警三卷「王安石三難蘇學士」では、小說のテーマ「難蘇學士」に關連するくだりを、蘇東波が「書きかけの詠菊の詩に續きを書いて無知をさらけ出し」と要約されているが、これでは蘇東坡がどうして無知なのかわからない。そこでこの文の前に、「黃州の菊が散りやすいのを知らず」という句を加えてはいかがであろう。また醒三十一卷「鄭節使立功神臂弓」は、「東京の富人張俊卿の手代鄭信は」で始まるが、原文にある、「東京の富人張俊

卿は、亡父の願解きのために岱岳廟へ出かけ、夢に炳靈公が鄭信を諸侯にするのを見る。そこで歸宅後、來訪した鄭信を手代にする。」というくだりが省略されている。しかし後に語られる鄭信の異常な體驗を理解するためにも、鄭信の非凡な素性を記したこの部分は省略しない方がよかったように思う。

小川氏が本書に梗概を載せられたものは大變有難く思うが、やはり要約は原文の叙述のテンポに合わせ、原文の趣旨にできるだけ沿って行なって欲しかった。

五

以上論考資料、梗概に關する本書の記載について氣付いた點をまとめてみたが、最後に原文の誤譯など個別の問題について論じてみたい。

喩一卷、本書二十四頁、小川氏の項に、〈『燕居筆記』……に「蔣興哥重會珍珠衫」がある。〉というが、ここは、〈『燕居筆記』……批點古今小說に「蔣興哥重會珍珠衫」がある。〉と訂正し、これが原話ではなく轉載であることを明示した方が親切であろう。

喩二卷、二十六頁、譚正璧の項に、〈『龍圖公案』卷七「借衣」(原注—卷二「鎖匙」「包袱」も類似)〉というが、傍點部の原文は、「尤近於話本及傳奇」であり、傍點部は、「より話本および傳奇に近い。」と改めるべきであろう。

喩五卷、三十一頁、小川氏の項に、『南部新書』を引いて、「故事は、宋代にすでに語られていたようである。」と記されているが、この論考は削除すべきである。なぜならば、本事は同頁葉德均の項に見える唐趙自勤の『定

命錄』であり、唐代の故事をことさら宋代にすでに語られていたと記す必要はないからである。小川氏の錯誤は、恐らく葉氏の論考資料を確認されなかったことによるものであり、この例を使用するのは恐縮ではあるが、論考を排列するだけでなく、論考資料に批判檢討を加えることが重要なことは、ここでも納得していただけよう。

喩十卷、三十九頁、小川氏の項に、「また晉の隗炤のことは明の……『群談採餘』……にも見えるから、趙景深の指摘は意味がある。」というが、小川氏が何を言わんとされるのか意味不詳である。というのは趙氏は類話として『晉書』を擧げただけであり、また胡士瑩氏もこれを本事として取らないのに、小川氏がなぜこの資料を重視されたのかわからないし、さらにこの資料が『群談採餘』に見えることが、どういう意味を持つのかもわからないからである。もう少し詳しい說明をされるべきであった。

喩十四卷、四十五頁、譚正璧の項に、〈『堅瓠辛集』卷之三「陳圖南」〉とあるが、ここは、譚氏『三言兩拍資料』によれば、〈『堅瓠辛集』卷之三「陳圖南」所引『群談採餘』〉とすべきである。

喩十五卷、四十五頁、論考の部に、「入話なし」の表示が缺落。

喩二十卷、五十二頁、梗概の「通天大聖・申陽公」は、「齊天大聖・申陽公」の誤。

喩二十一卷、五十六頁、小川氏の項に、「『堅瓠四集』卷一「錢婆留」所引『湘山野錄』にも見える。」というが、これはすでに譚氏の項に指摘する所であり、削除すべきである。

喩三十五卷、八十七頁、譚正璧の項に、〈『堅瓠甲集』卷之一「白紙詩」〉というが、譚氏『資料』によれば、正しくは、〈『堅瓠甲集』卷之一「白紙詩」所引『崖下放言』〉。

喩三十七卷、九十二頁、梗概に、「李太尉の娘」というが、原文によれば、正しくは、「童太尉の娘」。

喩三十八卷、九十三頁、梗概に、「自殺した」というが、「自首した」の誤。

喩四十卷九十六頁、梗概に、「宴席で嚴嵩の無法を嚴しくとがめたため」というが、原文によれば、「嚴嵩」はその子「嚴世蕃」の誤。

警二卷、百三頁、孫楷第の項に、＜小説は「至樂篇」の田氏扇墳と楚王孫來弔のことを敷衍したもの。＞というが、孫氏「今古奇觀序」の原文は、「妻死鼓盆而歌及嘆骷髏事、見本書『至樂篇』。小説卽演出田氏掘墳及楚王孫來弔事。」であり、ここは、＜妻が死んで盆を鼓して歌ったことおよび髑髏を嘆いたことは『莊子』「至樂篇」に見える。小説は田氏扇墳と楚王來弔のことを敷衍したもの。＞と翻譯すべきである。同様に、趙景深の項に、＜墳をあおいだことと盆を鼓して歌ったことは『莊子』「至樂篇」に見える。＞というが、趙氏の原文は、「嘆骷及鼓盆而歌、見『莊子至樂篇』」であり、「墳をあおいだこと」は「髑髏を嘆いたこと」に改めなければならない。因みに「至樂篇」には田氏扇墳のことは見えない。

警十三卷、百二十頁、梗概に、「迎兒を呼んで事情を聽き」というが、原文によれば、「迎兒」は「迎兒の夫王興」の誤。

警十六卷、百二十四頁、論考の項に、「傅惜華」がない。譚氏『資料』には傅惜華『宋元話本集』導言を引いて『志誠張主管』（『京本通俗小説』）を紹介しており、これは本書の徐士年の論考に先行するものなので、取り上げるべきであろう。

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（阿部泰記）

警三十二卷、百四十七頁、譚正璧の項に、資料『九籥別集』を孫楷第『小說旁證』から轉載したといいながら、さらに小川氏はこれに注記して、『九籥別集』の故事の全體を見ずという『小說旁證』の言を記したハナン氏の論文を紹介しておられるが、これは譚氏の說と矛盾するものである。兩說に對する小川氏の明斷も並記されるべきであった。

警四十卷、百五十七頁、梗概に、「この龍は趙酷なる人物が」というが、原文によれば、「趙酷」は「張酷」の誤。

警四十卷、百六十頁、注の項に、「譚氏は『歷代仙史』とするが、……新文豐出版公司影印本は『歷代神仙史』とする。」というが、本書の喩十三卷の譚氏の項にはすでに『歷代神仙史』と記されており、恰も譚氏が兩樣の書名を表記したかの觀がある。しかし譚氏は喩十三卷を始めとしてすべて『歷代仙史』と表記しており、本書もこれに從って表記を改め、小川氏の注は初出の喩の十三卷『歷代仙史』に付記すべきであった。

醒八卷、百七十三頁、梗概に、「孫未亡人の珠瑛」というが、「孫未亡人の娘珠瑛」の誤。

醒十卷、百七十八頁、譚正璧の項に、〈本事は『玉芝堂談薈』卷十『女子男飾』。ただこれは『情史』卷二にも、見えて、より簡略であり、『情史』によって刪節したかのようであるが、元になった書が『情史』の前にあったか、『情史』に別に基づくところがあったかしたのであろう。〉というが、これでは意味不明。ここは譚氏『資料』によれば、『玉芝堂談薈』卷十「女子男飾」の原注に、「按此條較『情史』卷二劉奇條爲略、似據『情史』刪節。但原書作於『情史』之前、或『情史』別有所據、姑兩存之。」という。これを翻譯すれば、「この一文は『情史』卷二劉

奇よりも簡略であり、『情史』によって刪節したかのようである。しかし原書（『玉芝堂談薈』）は『情史』の前に作られており、或は『情史』に別に基づくところがあったのであろう。一應兩資料を載せておく。」となる。ちなみに譚氏『資料』では『玉芝堂談薈』の後に『情史』を載せている。

醒十卷、百七十九頁、注の項に、「『賓退錄』は、宋の趙與時の撰だから、當然のことながら、明代のこの事件は記されていない。何かの間違いであろう。」というが、この注は削除しなければならない。なぜならば『賓退錄』には、宋趙與時撰のものと明趙善政（隆慶進士）撰のものと二種類あり、譚氏『資料』では、『庚巳編』の注に、「按明人筆記中記此事極多、有『五雜俎』、『賓退錄』、……」といい、後者を指していることは明らかだからである。小川氏は譚氏の注を翻譯しておられるのにどうしてこういう注を施されたのであろうか。おかしな事に、譚氏『資料』の引用書目にも『賓退錄』明・趙與時と記されているが、これも誤。ちなみに記事は明趙善政『賓退錄』卷二に見える。醒三十五卷、二百十五頁、譚正璧の項に見える『賓退錄』も趙善政撰。

醒十一卷、百七十九頁、梗概に、「またこの詩に模した疊字詩が屆けられたのも解讀した。」というが、ここは「またこの詩に模した秦觀の疊字詩が屆けられたのも解讀した。」と改めた方が具體的である。

醒十六卷、百八十七頁、論考の項に、「入話なし」の表記缺落。

醒三十七卷、二百十八頁、譚正璧の論考に對して小川氏は難解といわれるが、譚氏の說は決して難解ではない。すなわち譚氏『資料』では、『太平廣記』所引『續玄怪錄』を本事として擧げ、注として、「按影宋本『續幽怪錄』中不載此篇、『類說』以之屬『幽怪錄』、疑『廣記』所注出處有誤。』と付記しているが、まず譚氏は小川氏のいわ

れるように、「『續玄怪錄』は『續幽怪錄』の誤り」だとは思っていない。なぜならば、すぐ前の醒二十六卷の論考、本書二百二頁で、「『續玄怪錄』は『續幽怪錄』と同書異名。」と述べているからである。次に譚氏が『廣記』の出處の注に誤りがあるのではないかと疑うのは、小川氏のいわれるように現行の『續幽怪錄』にこの篇が收錄されていないという單純な理由からではなく、『廣記』が『續玄怪錄』に出づというとき、往々にして『玄怪錄』（『幽怪錄』）と混同していることが多く、しかもこの篇は『類說』にも收錄されていて出處を『幽怪錄』といっているため、『廣記』が「出『玄怪錄』」と記すべき所を「出『續玄怪錄』」と誤記したのではないかと考えたからである。

初拍二十一卷、二百五十八頁、譚正璧の項に、「袁忠徹の相術については、『雙槐歲鈔』……に見える。」というが、『雙槐歲鈔』等に見えるのは袁忠徹の相術ではなく、その父袁廷玉の相術である。

以上、論が時として編著者の些細な誤謬にまで及ぶことになったが、これによって本書がより活用しやすいものとなれば幸だと思う。

おわりに

本書に對する考察を終えて些か危惧することは、やはり最初に述べたように私自身の論考がないために、多く瑣末な點を論じて本書にふさわしくない書評となったのではないかということである。もとより小川氏の『論考集成』は、孫楷第、趙景深、譚正璧氏の多數の優れた本事考證を始めとして、この一文に紹介する暇がなかった鄭振鐸、阿英、辛島驍、杜聯喆、戴不凡ら各氏の少數ではあるが優れた論考を收錄する、『論考集成』とよぶにふさわ

しい書であり、本書が今後小説研究の促進に果たす役割は多大であると確信する。

一九八二年七月二十六日記

小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』（阿部泰記）